

# イギリス産業革命期の幼児教育(一)

## ロバート・オーエン

### ——社会改革と幼児教育——

久保いと



ロバート・オーエン (Robert Owen, 1771~1858) は、一八

えてみたいと思います。

一六年一月一日に、スコットランドのニューラナークという工場村で、性格形成学院 (The Institution for the Formation of

#### 産業革命と児童労働

Character) とよぶ学校をひらきました。この学校は、工場村の住民すべて——幼児・少年・成人——の教育をうけもつように三部構造をなして、幼児学校 (Infant School) は人間の性格形成にとってもっとも基礎をかたちづくるたいせつな学校として位置づけられ、その理論と実践においてユニークな幼児教育をおこないました。この小論では、オーエンが、どのような社会状況のなかで、人間教育をどのようにとらえ、また幼児教育をどう位置づけ実践したか、そして、それは現代のわたくしたちにとってどのような意味をもっているか、について考

イギリスでは、十七世紀末あるいは十八世紀はじめから経済上の変化がすすんでいました。すなわち、従来単純な家内工業から工場制手工業がしだいに進行したのです。農村では困いこみによって土地を失ったり、やせ地をあてがわれて土地を捨て値で手ばなしたりした小自由保有農民や小作人たちは賃金労働者に転落しました。つまり、農村人口の大部分を占めていた小地主や小作人の大部分が都市のスラム街にでて工場労働者となり、都市では、従来の産業のない手であった小親方製造業者や、そのもとで雇われつつ教育されていた職人や徒弟は新興

の工場制手工業に圧倒されて没落し、工場労働者に転じました。

農村や都市で進行したこのような経済上の変化はやがて教育のうえにも影響を及ぼし、たとえばこれらの没落階級の子弟たちの大学進学率の低下となつてあらわれていますし、下層民衆の初歩教授をになつていた有料の教区学校や庶民学校、あるいは無料の慈善学校や労働舎（保護者のない子どもなどを收容して労働させながらわずかによみかきの初歩を教えるところ）も、十八世紀後半から衰退しはじめます。

いままでは徒弟として住みこんだり、あるいは自分の家での手つだいをとおして労働と学習の結合した生活をしてきた子どもたちも、おとなたちといっしょに生活の基盤を失つて工場のスラム街に追いこまれました。ここでは五、六歳の子どもも自分のパンのために工場の賃労働者として、不衛生な環境のなかで、思考力をはたらかす余地のない、まったく教育性のない、機械あいての単調で長時間の重労働に、身心をすりへらす悲惨な事態をむかへたのです。こうして十八世紀後半には極貧者や工場労働者の騒ぎがおこり、下層の子どもたちの思想と道徳は不安定で危険なものとなりました。

そのうえ、一七六〇年代以降におこったハーグリーブズやア

ークライトらの紡績機、八〇年代におけるワットの蒸気機関やカートライトの動力織機などの発明によつて、こんどは本格的な機械制大工業時代がおとつれ繊維工業・鉄工業・化学工業・機械製造と染色の技術・石炭や運輸交通の発達がうながされ、いちだんと大規模の都市と大量の無産労働者群を輩出し、貧兒はますます非教育的できびしい労働条件のなかではたらかなければならなくなりました。当時は五、六歳の子どもでも、十四、十六時間ぐらいはたらくこともありました。四〇度にものぼる工場の熱気とほこりとよんだ空氣のなかで、粗食に耐えて長時間立ちどおしではたらき、住みこみ徒弟契約のばあいは床で仮眠をとつてまたはたらかされます。スラム街の家にかへつた子どもも不潔な環境やまずしい食事、まわりのおとなたちのなげやりで非道徳的な生活に身心をむしばまれていきました。

かううじてこのような苦しい労働からまぬがれた三、四歳の子どもたちも、しあわせではありませんでした。低賃金で労働力をかりあつめるため、資本家たちは女や子どもを雇用しましたから、母親も工場へ労働にいきました。またそうしなければ食べていけなかつたのです。保護者のいない幼児たちはさかり場に出かけては、スリヤかっぱらいの手先になつたりして、子どもの非行がひんばんにおこりました。乳兒をもつ母親は、近

所の老婆に若干の銭をわたしてゐるすのせわをたのんだり、スラム街の屋根裏部屋に小さい子をひもでつないだり、かぎをかけたりにして工場へ出かけましたから、このばあいも、るす中に窓から落ちて事故死をしたり、けがをしたりという事件があいつぎました。家庭生活はすっかり破壊され、家庭の教育機能は崩壊し去りました。子どもばかりではなくスラムのおとなたちの犯罪も頻発し、大きい社会不安をもたらしました。こうした下層階級の問題がようやく人道主義的な人たちの注意をひくようになったのです。

### オーエンの工場法運動

十八世紀末には、このような重労働による過労と栄養不良で抵抗力を失った少年工たちを伝染病がおそいました。医師団の調査報告書には、とくに十四歳以下の子どもにたいして、労働時間の短縮と、深夜作業廃止の必要が述べられていました。

一八〇二年、ピールとオーエンの努力によって最初の工場法が成立しました。これは徒弟を対象として、就業最低年齢九歳、労働時間実働十二時間以下、労働時間内で読み書き算術あるいはそのうちのいずれかを教えること、毎月一回日曜日に一時間キリスト教の原理を教えること、という教育条項を含んで

いました。これはイギリス最初の工場法でした。企業側が要求するはげしい重労働からいかにして少年工の教育時間を確保するかということが、イギリスの工場法の課題だったわけです。しかし、工場主たちは抜け穴をさがしてこの法を守りませんでした。

一八一五年一月、オーエンはグラスゴーでひらかれた紡績業者の会で、つぎのように少年労働者の待遇改善を提案しました。「子どもたちがまだ身体的にも精神的にも教育をうける能力すらついでないうちから、彼らを工場へ追いこむようになったのは綿工業のせいである。紡績工場は生ける骸骨の倉庫のようになっているではないか。しかも子どもたちはひよろひよろしながらなお数年生きながらえて、そのあいだにあらゆる悪習を身につけて社会にほうり出され、その悪習をまきちらして歩く」と。そして、オーエンはあたらしい工場法の原案起草し、ピールをとおして下院に提出しました。これは十歳未満児の使用を禁止し、労働時間を十二時間半（実働十時間半で一時間半の食事時間と半時間の教育時間を含む）とするなどの規定をもったものでした。

このあとオーエンは約一年にわたって全国の工場をくまなくしらべて、少年労働の実態を調査しました。この工場法はよう

やく一八一九年になって成立しましたが、それは最低雇用年齢を九歳とし、労働時間は十二時間半で教育条件はけずられてしまい、後退した内容になっていましたし、工場主たちはまたも抜け穴をさがして守ろうとしました。しかしこの工場法は、企業の私的利益の追求から年少労働者を保護するための公的規制を設けた法として、やがてイギリスの民衆教育が確立されていく前提条件となったものです。この点で、オーエンがイギリス民衆教育にあたえた貢献は大きいといえましょう。

### ニューラナーク紡績工場

これより先、オーエンは、一八〇〇年からスコットランドのニューラナークで大きい紡績工場を営っていました。ここでは工場経営の改革と、労働者の生活条件・教育条件の改革を達成しました。この紡績工場はオーエンの義父デールからひきついで、他の二人の出資者とともに共同経営をしたものです。オーエンがニューラナークに移り住んだころの村は、労働者としてあちこちからかりあつめられた約一三〇〇所帯が部落をなしていた新開地でした。

ここでオーエンは、企業経営者としては、できるかぎり改良された機械をつかって効率のよい経営をして、十時間半の労働

で従来より以上の利益をあげ、労働に対しては、不況時においても失業者を出さず、給料を払ってその生活条件の確保に努力しました。このような実績を背景として、彼は啓蒙主義的人道主義の立場にたった社会改良家としてニューラナークの実験をつづけるのです。

労働者の教育についていえば、オーエンのまえの経営者デールは、当時の一般の企業家にくらべて博愛的慈善的でした。四と五〇〇人の五歳から十歳ぐらいの子どもたちがよい宿舍と食事と衣服をあたえられ、ながい労働のあとで読みかたと、年長者には書きかたの教育をすることも試みられていました。しかし労働のあとでの授業は、すでに子どもたちの力が尽きてしまっているあとだけに、責め苦でしかありませんでした。なぜならオーエンは、彼らの多くがただねむりこんでいるのをみたのでした。年少の子どもたちを労働させながらそのあとで学習させるということは、子どもたちの体からみて不可能であること。オーエンは悟りました。そこでこの考えのちに性格形成学院という教育機関の開設となって実現し、ここでは十歳ないし十二歳以下の子どもたちを肉体労働から完全に「解放」して、学校生活だけをおくらせる構想となって発展したのです。

## 性格形成学院

一八一六年一月一日、性格形成学院の開設にさいし、オーエンはニューラナーク住民をあつめて講演しました。そのいちばんはじめに学院の目的について、「第一の目的は、当地方の住民の直接的な幸福と利益を、第二の目的は、近隣の地方に住む人びとの福祉と利益を、第三の目的は、大英帝国の領土全体にわたる広汎な改良を、最後の目的は、世界中のあらゆる国民の漸次的改良をめざしているのです」「私がみなさんにあたえようとしている教育の内容を、みなさんとみなさんの子どもたちが完全に身につけたなら、みなさんの心はひろくなり、そしていっそうよい社会に住むことを願うようになるにちがいありません」と述べています。この学院を出発点として、やがては広汎な社会の漸次的改良をしようということがオーエンの大きい構想でした。

その改良された社会とは、有害な衝動と貧困と犯罪と悲惨を防ぐ手段をもっている社会であり、すべての人が教育をうけ、すべての人の身心がわるい習慣や危険な感情の生ずるスキのないように指導されている社会、老人がたいせつにされ、すべての有害な差別が撤廃され、意見の多様さはあってもそれが社会

の混乱をひきおこすことのない社会、ひとりひとりがよい健康と知性のもち主であり、みんながあらゆる健全な娯楽をたのしめるような社会でした。このように、すべての人が安定した生活をしなめる社会づくりの出発点となる使命をおびて、性格形成学院は出発したのです。

この学院はニューラナーク工場村の中央にあって、やっとよちよち歩きのできるようになった一歳半ごろからはじまって、幼児、少年、青年やおとなまで、すべての村人が教育をうけるところでした。幼児は一〜三歳と四〜五歳のグループにわけられ、そのうえに六〜十ないし十二歳の子どものためのフルタイムの教育がつづき、そのあとに、工場で働いている二十歳までの青少年のための夜のパートタイムの教育がつづき、そのあとにもっと上の年齢の人たちの冬季毎週三晩ずつの夜学があり、そのほか日曜日には、村人のレクリエーションが行なわれました。

学院は、ニューラナーク村の人たちの教育と文化のセンターでした。これはまた、ニューラナーク村を単位としたあたらしい社会づくりそのものでした。共産社会ではありませんでしたが、共通の改善された経済的労働条件を享受し、共同の福祉・教育施設をもち、すべての村人が生活の安定と健康を享受する

という点では、理想の社会でした。このような理想の社会をつくるために、性格形成学院の教育は、抑圧されゆがめられてきた労働者たちにあたらしい社会と生活への展望をあたえ、彼らの意識と行動を改善していく大がかりな政治的社会的教育的実験をやりぬくために必須なものでした。

これに先だつて、オーエンは、一八一三年に『社会についての新見解』という書物を出版しています。これは十数年にわたるニューラナークでの実践のあいだに熟成した思想をまとめたもので、理想の社会づくりのためには人間そのものが改造されないといけないこと、また人間そのものが改造されないかぎりあたらしい理想の社会もつくりえないこと、しかもこの人間の性格づくりは意図的に可能であることを示したものでした。

オーエンのこのような考え方は、性格形成論とよばれていました。それは (1)人間の性格は、もつとも善いものからもつとも悪いものまで、もつとも悪かなものからもつとも賢いものまで、およそどのような性格でも、特定の方法さえ講じれば、どの社会にたいしてもひろく世界にたいしても与えられる。しかもその方法はそれぞれの統治者の支配下にある。(2)人間の性格は、例外なしにつねに彼に先だつ者によって作られる。先行者

たちは思想や習慣——それは彼の行動を支配し指導する力になる——をあたえる。だから人間は決して自分で自分の性格をつくっているのではなく、またそんなことができるはずもない、という考え方をした。過去の歴史や諸外国の現状を分析して、オーエンはこのような確信をもつにいたつたのです。

これはいいかえれば、人間の性格は政治家によってつくられるという仮説で、民衆教育への政治的支配にたいする鋭い分析でした。したがって、このような仮説をもつた以上、こんどは労働者自身の間としての平等な利益を保証し、彼らを解放するための教育上の実験をやってみて、仮説のたしかさを実証してみなければなりません。性格形成学院は性格形成論の実験の場であり、ニューラナークの理想的工場村は、あたらしい人間形成とあたらしい社会づくりの検証の場であつたわけです。

### 幼児学校

だから、幼児学校も、こうした大きい政治的・社会的・教育的実験と無関係ではありえませんでした。幼児学校は性格形成学院のもつとも基底に位置づけられた学校で、人間の合理的性格形成のきそとして大切な教育機関でした。

性格形成学院は二階建のたてもので、二階の四〇フィートに

九〇フィートのひろい部屋と、同じく四九フィートの部屋からなり、一階はほぼ同じ大きさの三つの部屋にわかれ、幼児学校には一階があてられていました。昼間の学院は、七時三〇分～九時、一〇時～十二時、三時～五時（冬期は十二時三〇分～二時）を出席の時間としていましたが、幼児学校では、子どもたちはこれからの半分の時間を部屋にとどまり、のこりの時間は学院のまえのひろい庭でまったく自由にしあわせにすごしました。なお、幼児学校は無料でした。

子どもたちの指導をうけもつ人として、オーエンは工場村からブカナン (James Buchanan) という気のやさしい男の教師と、ヤング (Molly Young) という十七歳の娘さんをえらびました。子どもたちは、当時の伝統的學校がつねにやっていたような書物による教えこみの教育や体罰主義に苦しめられることもなく、あそびや生活のなかで、隣人にたいする親切や友愛や社会的奉仕の精神と行動を教えられました。子どもたちは一～三歳と四～五歳の二つのグループにわかれしました。

幼児學校の教育方法は、子どもの合理的な性格形成を目的としていましたから、この方針にそって子どもをたのしくあそびせながら おりにふれて身のまわりの事物の名称や性質・用途などを、話しあいをおして、直観的經驗的に学ばせる方法が

とられ、形式ばった時間割はありませんでした。子どもの興味を刺激するように、いろいろな事物を目にふれるところにおいて、いわば環境を整備することによって、子どもの方から自発的な研究心がおこるのをまっけて、その自発性を尊重しつつ話しあいをすすめていきます。「子どもが十歳にもならぬうちから、かりそめにも書物が用いられていいかどうかを私は疑問に思う。ともあれ彼らは書物なしで、十歳ですぐれた性格を自己自身のために作るであろう」とオーエンはいつています。

体罰を禁止すること、これもニューラーク村全体の原理でした。工場でも性格形成学院でもこの原理は守られました。「子どもたちは罰とか罰のおそれなどまったく抜きで教育され、學校にいるあいだはかつてみたこともないほどまったく幸福な人間であった」「あらゆる報償と刑罰は——『自然それ自体』がもたらすものをのぞいては——それ自身においても不当であり、その結果においても不利なものとして念入りに放逐された」とオーエンは述べています。すなわち、伝統的な管による教育を非合理的なものとしてとりやめ、それに代わって愛情と奉仕の教育をきづきあげようとしたのです。

以上の方法原理にもとづいて指導された幼児學校の教育内容は、大きくわけて、自然の教育・社會の教育・情操教育・体育・

友愛への教育となりましょう。子どもたちは目にみえるもの——実物・模型・絵によって、うちとけた話しあいによって教えられます。幼児教育の部屋には動物の絵や地図を備えつけ、しばしば野原や森からもってきた自然物がおいであって、これらは子どもたちの好奇心を刺激し活発な話しあいをさせました。また、二歳からダンス・唱歌をはじめ、長じて軍事教練も男女ともにやりました。これは分隊にわかれ、太鼓や笛にあわせて行進する音楽隊のようなものでした。そして、これらすべては合理的性格形成のねらいのもとに友愛へのモラルの教育というしっかりした核に支えられて指導されたのです。

労働者階級が、支配者によって抑圧され搾取され、その労働や福祉教育の権利をうばわれ、生存からさえ追いやられている状況にたいし、オーエンはするどい矛盾を感じ、このような疎外状況を改めるには経済の変革と教育の変革しかないと考えました。

ニューラナークの実践では、工場主と労働者の立場の差はそのままに、オーエンは工場主としての上からの改革をすすめたわけですが、労働者の真の全面的解放のためには、資本家によって上からあたえられる改革だけで達成できるかどうか。

また、オーエン以外のすべての工場主にそんなことが期待できるかどうか。このことは、現代においてもなお一つの大きな問題点として残されていると思います。労働者教育は、労働者自身の政治的・人間的解放のための前提条件として重んじられました。幼児教育もまたこのような基本的構想に位置づけられて実践されたわけです。

社会改革と教育改革の相互関係についてオーエンがのこした課題は、いまもなおわたしたちに重くのしかかっているといえるでしょう。

#### 参考文献

ロバート・オーエン 「ロバート・オウエン自叙伝」

ロバート・オーエン 「社会についての新見解」

ロバート・オーエン 「社会変革と教育」

梅根 悟 「西洋教育思想史」 (3)

梅根 悟 「世界教育史」

津守真・久保いと・本田和子 「幼稚園の歴史」

(和光大学)